

R. Browning: “Childe Roland to the Dark Tower Came”

—「暗黒の塔」の象徴性

野 口 忠 男

- 1 はじめに
- 2 嫌悪の旅
- 3 建物の二面性
- 4 暗黒の塔の象徴性
- 5 おわりに

1 はじめに

W. C. DeVane によると “Childe Roland to the Dark Tower Came” の詩は、詩集 *Men and Women* (1855) に最初載り、34 連からなる弱強 5 歩格 (iambic pentameter) つまり英雄詩 (heroic verse) の形式で構成されている。1852 年 Browning は新年の決意として、一日に必ず一篇の詩を書くことにした。この詩は同年の一月 2 日にパリで書かれたものである。詩人は 1 日に “Women and Roses” を書き、3 日に *Men and Women* の巻頭を飾る “Love among the Ruins” を書いている。“Childe Roland” の詩の表題は、Shakespeare の *King Lear* (3 幕 4 場 187—9 行) から借用したものである。

Child Rowland to the dark tower came,
His word was still — Fie, foh, and fum,
I smell the blood of a British men.

これは “Child Rowland and Burd Ellen” と題する ballad の一節である。この ballad については後で少しく触れることになる。当時 Browning は

P. B. Shelley の書簡に載せる essay を書くため Shakespeare の作品を読んでいたのである。

この“Childe Roland”の作品は、Browning の重要な作品として今までに様々な視点からの解釈がなされて来ている。その簡単な流れをたどることにより、本小論の論点を明確にすることが出来ると思える。

Browning は 1877 年にある人からこの作品の寓意的解釈について尋ねられた時に、“Childe Roland”の詩想がまるで一種の夢のように到来したことを語っている。

Childe Roland came upon me as a kind of dream.⁽²⁾

詩人の応答の真偽は別にしても、この詩が一種の夢の形で着想されたことは意味のあることである。詩人は A. W. Hunt (画家で 1866 年 Childe Roland の作品の水彩画を描いた人物) への手紙の中で作品に現われる塔と沼地に触れている。

My own ‘marsh’ was only made out of my head,— with some recollection of a strange solitary little tower I have come upon more than once in Massa-Carrara, in the midst of low hills.....⁽³⁾

これから理解されるように、“marsh”は想像の働きにより形成されたものであり、塔は実際に体験した塔が意識されているのがわかる。さらに Browning が作品中の馬に関して Mrs. Orr へ語った言葉がある。

he told Mrs. Orr that the blind old horse of the poem had been suggested by a figure in a tapestry of his own.⁽⁴⁾

この詩中の盲目的な老いぼれ馬は、Browning のつづれ織りに描かれた動物が暗示されている。詩人はこの作品を想像と体験を組み合わせながら構成していることが理解される。

次に研究者達のこの詩に関する見解を考えてみたい。Mrs. Orr は“a simple work of fancy”⁽⁵⁾と語り、この作品の空想と想像の面を重視して

いる。この解釈は Griffin と Minchin の純粋なロマンス "pure romance"⁽⁶⁾, さらに W. L. Phelps の "the power of creative imagination" "this wholly romantic poem"⁽⁷⁾ へとつながって行くものである。Berdoe は *Browning Cyclopaedia*⁽⁸⁾ の中で、この詩を寓意詩 allegory として捉えている。

For my own part, I see in the allegory — for I can consider it no other — a picture of the Age of Materialistic Science, a "science falsely so called," which aims at the destruction of all our noblest ideals of religion and faith in the unseen.

彼は真理の追及 "the Search after Truth" や愛の寓意性 "an allegory of Love" を考える批評家を紹介し、さらに近代の物質主義に対する寓意として位置づけている。本論に於いてとりわけ重要な暗黒の塔は、不実 "Unfaith" や知識 "Knowledge" の寓意として理解され、塔へ到る道は破壊と死 (タナトス) への道 "the way of the Dark Tower was the way of destruction and death"⁽⁹⁾ として解釈されている。G. K. Chesterton は、実験的な詩として評価している⁽¹⁰⁾。

Robert Langhaum は *The Poetry of Experience* の中で Roland の運命を経験の観点から捉え、経験を劇的に語ることの意味を重視している。

It is not an allegorical interpretation to say that the poem is about the experience of destiny, as awful presage and as awful yet triumphant understanding of the very worst.⁽¹¹⁾

さらに彼は嫌悪の重要性を認めている。

.....the trek has been loathsome, the knight has hated it every step of the way, and the Dark Tower turns out not only sinister but hateful — "squat."⁽¹²⁾

Thomas Blackburn は *Robert Browning A Study of His Poetry* の中で

深層心理学の観点から分析を行っている。Blackburn の視点は、本論を論じる上で示唆に豊むものである。

The poem describes a man's journey into the interior darkness of himself in order to confront that nexus of destructive energy which Jungians call the Shadow.⁽¹³⁾

Clyde de L. Ryals は、*The Life of Robert Browning* の中で広い視点に立脚し、“Childe Roland” は Sordello の流れをなすものであり、ロマン派詩人達と同じ方向をたどるものであると指摘している。

Sordello's view of the gin of poetry is surely coincident with Roland's discovery that he has in fact been following in the same direction as his lost peers.⁽¹⁴⁾

Ryals の論点を補うために、*Sordello* (1840) について考えて見ると、これは 13 世紀の吟遊詩人 Sordello の魂の成長を扱った「心理の叙事詩」である。彼は吟遊詩人として悩み苦しむ人々を救う理想愛の追及の道を選ぶべきか、それとも王党の将軍の子として君主となりパルマ姫との結婚に生きるべきかの二者択一の狭間に立ち激しく苦悩する。最終的に彼は、吟遊詩人として愛の精神を貫くことを決意する。しかし激しい苦悶の為に息絶えてしまうのである。つまり Sordello は愛の探求の究極に到って死に直面する悲劇なのである。愛追求の悲劇のテーマは、Browning が心酔していた P. B. Shelley の *Alastor* に明白に表現されている。

Daniel Karlin は、*Browning's Hatreds* で人間の基本的感情を形成する嫌悪の観点から作品を分析している。以上の様に批評の流れをたどって見ると、時代による批評の視点の違いだけでなく、この“Childe Roland” の詩が、寓意的解釈から始まり、心理的解釈がますます重視されて来ていることが納得される。

Browning は、複雑微妙な人間の感情を流動する動的なものとして捉え、愛や嫌悪の織りなす心の動きを劇的に表現している。この小論に於て、多様性と変動こそが人間の心の実相である立場を重視し、主人公

Roland の心理の微妙な動きを嫌悪を中心にたどり、暗黒の塔の象徴性に焦点を絞って考えてみたい。この暗黒の塔に騎士 Roland の探求の謎が秘められていると思われるからである。

2 嫌悪の旅

Childe Roland が暗黒の塔に達するまでに体験する嫌悪の感情の場面を便宜上次の様に分類してみたい。

- (1) 意地悪な目をした白髪のアシナエとの出会い (1~3 連)
- (2) 小道に広がる無気味な荒野 (8~14 連)
- (3) 仲間の騎士たちの汚れた行為と反逆的行為 (15~17 連)
- (4) 害毒を含んだあわ立つ小川 (19~21 連)
- (5) 対岸の荒れはてた不毛の土地 (22~26 連)
- (6) 一羽の黒い大鳥 (27 連)
- (7) 夕闇がせまり醜い山々に取り囲まれる (28 連)
- (8) 洞穴の中へ入る (29 連)
- (9) 暗く丸い塔の出現と不思議な体験 (31~34 連)

私達は Childe Roland が現在置かれている精神的状態をまず考えてみる必要がある。語り手は次の様に述べている。

For, what with my whole world-wide wandering,
What with my search drawn out thro' years, my hope
Dwindled into a ghost not fit to cope
With that obstreperous joy success would bring, —
I hardly tried now to rebuke the spring
My heart made, finding failure in its scope.⁽¹⁵⁾

この全世界の放浪 "My whole world-wide wandering" (l.19) と長年の探求 "my search drawn out thro' years" (l.20) とは、とりもなおさず暗黒の塔の探求 "the Dark Tower's search" (l.40) であると思われる。彼は長い苦難の探求 "I had so long suffered in this guest" (l.37) のた

めに、希望は亡霊のごとくやせ細り、臨終まぎわの病人 “a sick man very near to death” (I.25) の姿になっている。現在の Childe Roland は、心身ともに成功の激しい喜びにとても耐えられそうもない程衰弱しきった状態に置かれている。しかし彼は失敗を意識しながらも、残されたかすかな望みを信じて前進して行く。ここには Roland の心の中核に強靱な意志が働いていることが認められる。苦境に瀕している Roland は、もろもろの外界の事象をいかに認知するのであろうか。

(1) 意地悪な目をした白髪のアシナエとの出会いから検討して行きたい。Childe Roland が、探求の苦難に会い希望もうせた時、埃だらけの大道 “the dusty thoroughfare” (I.12) “highway” (I.44) で出会う杖 “his staff” (I.7) を持った白髪のアシナエは、夢の中に出現する老賢者を思わせる。彼は暗黒の塔への道を Roland に指し示す重要な役割を果たす存在である。しかし絶望の淵に立たされている Roland には、潔よく信ずることの出来ない嫌悪すべき人物である。Roland には、彼を一つの獲物として捕え、死へと導く恐ろしい存在として受け止められる。それにもかかわらず、白髪のアシナエは、暗黒の塔へ至る正しい道を Roland に示してくれたのである。

(2) 小道に広がる無気味な荒野の描写を考えて見たい。白髪のアシナエから別れた Roland は、物淋しい日に大道から小道へと入って行く。小道の意味に関して C. G. ユングは次の様に説明している。

集会的無意識の必要欠くべからざる反応は、元型的な性質をもったイメージの中に表現される。自分自身との出会いはまず自分の影との出会いとして経験される。影とは細い小道、狭き門であり、深い泉の中に降りていく者はその苦しい隘路を避けて通るわけにはいかない、つまり自分が誰であるかを知るためには、自分自身とつき合ってみなければならぬ [つまりその狭い門を通り抜けなければならない]⁽¹⁶⁾ である。

ユングによれば細い小道は、自分の影であり、自分の真の姿を認識するためには、小道や狭き門や深い泉を避けて通ることは許されないのである。Roland のたどる小道は、貧困と怠惰と憎悪 “penury, inertness, and

grimace" (l.61) の灰色の荒野 "grey plain" (l.52) である。花も草木も茂らない、ただ癩病患者の髪の毛のような雑草がはびこり、盲目のやせ馬が一匹骨もあらわにぼんやりと立っている。Roland は、影としてのこの嫌悪すべき荒れ果てた自然の光景をひるむことなく直視している。ここにはいかなる対象をもあるがままに捉えることによって、真実の自分自身を見出そうとする姿勢が認められる。小道のイメージは、自己認識に到る道程として、重要な機能を果していることがわかる。

(3) 仲間の騎士たちの汚れた行為と反逆的行為に関する場面を調べてみたい。Roland は、過去の幸福な光景を思い起こし、暗黒の塔探求への思いを新たにしようとする。しかし回想される場面は、騎士カスバートの汚れた行為と騎士ジャイルスの絞首刑に処される哀れな反逆行為であった。Roland の衰弱しきった心には、仲間の過去の栄光も罰と悪の嫌悪すべきものに転じてしまうのである。少くとも Roland には、ガスバードやジャイルスの犯した過失は絶対に行わないという強い自負心があったと思える。仲間への憐憫と嫌悪は、彼の探求への思いをさらに強めることはあっても、決して弱めることはなかった。彼は終始騎士としての精神を徹底的に貫こうと思っているのである。

(4) 害毒を含んだあわ立つ小川が、Roland の行く手に蛇のように見える。この小川は、あわ立ち流れ、怒った黒い渦巻が泡やあぶくを飛ばしている。後で触れる "By the Fire-Side" 中の清らかな川とは異質のものである。低いいじけたはんの木が、川の上に折れ曲がり、柳の木が絶望の発作をおこし真逆さまになってはえている。身投げした人の群れ "a suicidal throng" (l.118) があり、死者たちのたむろする地獄界の様相を呈している。この小さな川は、彼に死者の嫌悪と恐怖を与え、ユング流に言えば、影の一つである深い泉に相当するものであろう。彼は死者たちとの感覚的な直接の接触を体験している。

(5) 対岸の荒れはてた不毛の土地へ目を転じて見たい。Roland は小川を渡り対岸へたどり着くことが出来た。そこは格闘や戦さの跡が残る湿地であり、残忍な機械——車輪や拷問用の歯車が散乱している。切り株のあるでこぼこだらけの狭い土地、荒れ放題の沼地、膿や腫れ物が生じている地面。この地は過去に幾多の人々が殺された戦場の跡であり、Roland は嫌悪と恐怖と不安の感情をますますつのらせながらも、一貫

して客観的態度を保持しながら前進して行く。

(6) 一羽の黒い大鳥について考えてみよう。彼の目指すところは相変わらず遠く、いくら見渡しても夕闇の他には何も見えない荒地であった。彼の不安感は激しくつり、思案に暮れているとその場に突然一羽の真黒な大鳥“a great black bird” (l.160) が姿を現わした。彼はこの鳥こそ久しく求めていた案内者だと直感した。河合隼雄氏は『昔話の深層』の中で、鳥について述べている。「鳥は未来を予告するものとして、しばしば神話や昔話の中に登場する。」⁽¹⁷⁾さらに鳥は太陽と結びつき、火や光をこの世にもたらす働きもあると説いている。32連の落日の場面へとRolandを誘ってくれる幸運をもたらす鳥として読むことが出来る。窮地に立つRolandは、この黒い鳥の出現により、今までの嫌悪や不安感を取り除けるかも知れない希望の予感が得られたように思える。

(7) 夕闇が迫り醜い山々に取り囲まれる場面へ移りたい。Rolandは夕闇がせまり、平野は消え去り、醜い山に取り囲まれている。彼はここからの脱出を考えるが、何か悪いことが身に振りかかってくる気配を覚え、悪夢“a bad dream” (l.171) に捉えられたような感じになる。彼は道を進んで行くことを断念しようと思った時、実に不思議なことが生じたのである。Rolandは(8) 洞穴の中に入る。“You're inside the den!”ここは彼が長年探し求めて来た場所である。右手に2つの山岳が二匹の牡牛のようにそびえ、左手に一つの不毛の高山が見える。彼に激しい眠気がおそいかかる。

(9) 暗く丸い塔の出現と不思議な体験——真ん中に立っているものは、愚か者の心のように暗く丸い円塔であった。

What in the midst lay but the Tower itself ?

The round squat turret, blind as the fool's heart,

Built of brown stone, without a counterpart

In the whole world. The tempest's mocking elf

Points to the shipman thus the unseen shelf

He strikes on, only when the timbers start.⁽¹⁸⁾

塔は褐色の石で築かれ、世にもたぐいえないものの姿をしていた。そこに

は悪魔が住み、人の命を奪い取る魔の世界である。突然落日があたり
に射し込み、暗闇の世界に残照が赤く燃えるのである。この思いがけない
天からの光は、かすかな希望の前兆であり、Rolandの深い悲嘆と絶望に
うちひしがれた心に光明を投ずる働きが暗示されている。引き続いてこ
の探求の旅で命を落とした同志の名前が、弔の鐘のように彼の耳に聞こ
えて来た。剛毅な者も大胆な者も皆命を失ない、この一瞬に多年の仲間
達の悲しみが鳴り響いていた "One moment knelled the woe of years"
(l.198)。彼ら亡霊は、山腹に立ち並び、Rolandの最後を見とどけようと
集まって来た。彼らは過去の罪を浄化する火焰につつまれていた。
Rolandは、この危機の場から逃げ出すことなく、ひるまずに "Daunt-
less" (l.203) にただけしく合図の角笛 "the slug-horn" (l.203) を口
に当て吹き鳴した。「チャイルド・ローランド 暗黒の塔に來たぞ」この
言葉を持って詩は終っている。それでは何故 Rolandは暗黒の塔に向
って角笛を吹き鳴したのであろうか。語り手は暗黒の塔の意味も Roland
のその後の様子に関し何も語っていない。詩人は全ての解釈を読者の
読みにまかせる暗示に豊んだ手法を用いていることは事実である。Vic-
toria朝の画家 Sir William Quiller Orchardson (1832—1910) の実験的
な描写法によく似ている⁽¹⁹⁾。私達は詩の中に参画し、暗黒の塔の象徴性を
問い、Rolandの探求の意味を読み取る努力をしなければならない。暗黒
の塔の象徴性を考察する前に、Browningの詩に於ける建物の意味につ
いて見てみたい。

3 建物の二面性

Browningは詩を構成する枠組として、建物(家・塔・教会・幕屋)を
多く用いている。建物の意味を考える場合、その二面性—開かれた建物
と閉ざされた建物—について調べてみる必要がある。私達は開かれた建
物の例として "Love among the Ruins" の中で歌われている小塔 "tur-
ret" と "By the Fire-Side" に描かれている礼拝堂 "chapel" について見
てみたい。

"Love among the Ruins" は、語り手の男を通して廃墟の小塔で二人
の愛が一つになることを歌ったものである。夕暮が迫り、羊の群れも山

も小川も夕闇の中に溶け込んで行く頃、廃墟の小塔で「熱い眼ざしの金髪的女性」「a girl with eager eyes and yellow hair」(1.55) が待っている。外へ開かれた出口のある塔の中で、愛する二人の歓喜の瞬間が訪れる。二人は無上の豊かさと喜びを感じ、過去の栄光も栄華への欲望も愚かなものであると語る。これから理解されるように、廃墟の小塔は過去のむなしい栄光と今の愛が対立しながら合一し、新しい愛の精神世界が開かれる創造の磁場であると言える。次の“By the Fire-Side” は、詩人が老境に達した時、妻と炉辺に座しながら若き日に、山中の朽ちた礼拝堂の境内で二人の靈魂が一つに融合した秘密を自ら回想するものである。語り手は回想の中で芸術美の豊かなイタリアから青春のアルプス山中の寂しい礼拝堂へと向って行く。はるかかなたの雄大なアルプスの渓谷の中腹に、荒れ果てた礼拝堂が見える。遠方脚下には、世俗的な塔か水車か鉄工場がある。二人の巡礼の心象に対して、Cook はいみじくも Dante の煉獄篇のイメージを認めている。礼拝堂の手前に細流があり、弓形の橋がかかっている。

And yonder, at foot of the fronting ridge
 That takes the turn to a range beyond,
 Is the chapel reached by the one-arched bridge
 Where the water is stopped in a stragnant pond
 Danced over by the midge.

The chapel and bridge are of stone alike,
 Blackish grey and mostly wet;
 Cut hemp-stalks steep in the narrow dyke.
 See here again, how the lichens fret
 And the roots of the ivy strike!⁽²⁰⁾

この橋を渡ることは、煉獄の世界と天国の世界との間を流れる清い細流で、現世の悪・罪を浄化し、清い姿になり変って神の国である魂の安息所へ到る意味と解することが出来る。この礼拝堂には聖日だけ 12 名の信者が集い、牧師を交えて素朴な礼拝が行われる。礼拝堂の正前には、野

に叫ぶ浸礼者ヨハネの絵がかかっている。この聖なる礼拝堂の近郊には、小鳥がさえぎり羊が遊んでいる。これはとりもなおさず現実の世界から隔絶された楽園と言える。境内の静寂が深まり、二人の視点は荒れ果てた礼拝堂の外側から内側へと移動して行く。消えかかった壁面、苔、小さな入口、粗末な扉、四角い窓の鉄格子、降ろされた十字架、空の祭壇、いまは亡き建築士の付けた日付。この礼拝堂の内部をのぞき込むことが可能なことから、開かれた建物であることが理解される。二人は礼拝堂の内側を見ることによって、互いの心を開き、聖なる領域をかいま見て、魂と魂の融合を成就させている。少くともこの礼拝堂には、魂の融合をきたし、さらに高次の世界を求めて飛翔する精神を培う創造の空間があると言える。

次に閉ざされた建物として "*Pippa Passes*" の朝の家の場面と "*Saul*" の幕屋 "tent" について考えてみたい。Pippa が空想する理想的な愛の最初の家は、若く美しい妻 *Ottima* と老いた夫 *Luca* の住むところである。実際家の中では、*Ottima* と彼女の家庭教師 *Sebalde* が、*Luca* 老人を殺害し、奥の部屋に放置し窓辺で愛に溺れている。家の窓は閉ざされ世俗からも隔絶された世界である。恐怖におののく *Sebalde* に対して、*Ottima* は楽しい夏の日の思い出を語り、官能の欲びへ彼を再度誘い込もうとする。この時通りを行く清純な Pippa の歌声が、閉ざされた家の中へ流れて来て、二人とも良心の呵責に絶え切れず自の命を絶つことになる。この閉ざされた家は、情欲と殺害の行われていた悪の世界を示しながらも、清らかな歌声によって苦悩する魂が覚醒する。閉ざされた空間に於いて、死と再生の劇的な展開がなされるのである。"*Saul*" では、閉ざされた暗い幕屋の中で *Saul* 王は黒い大蛇の悪霊に取り付かれ、激しく懊悩している。神に愛されていた若き *David* は、*Saul* 王に向って豎琴を弾き、彼の悩める魂を解放しようと一心に努める。*David* の無償の愛により、悪霊はついに退散し *Saul* の魂の救いが暗示される。この閉ざされた幕屋は、悪霊に取り付かれた人間を幽閉し、ぎりぎりの苦悩と絶望に直面させる暗闇の空間である。しかしこの闇の空間は、神の愛によって光明へと転化する死と再生の空間である。

Browning にとって開かれた建物は、愛を成就させ魂の融合を実現させる創造の空間であり、閉ざされた建物は、悪や死を越えて再生を可能

にする闇と光の共存する空間である。次に私達は完全に閉ざされた塔としての暗黒の塔の象徴性について問わなければならない。

4 暗黒の塔の象徴性

Browning が *King Lear* の一行を詩の主題として選んだことの背後に何らかの意図が隠されていないであろうか。*King Lear* に於いては、Lear 王が敵の手中に落ちることへの懸念をそれとなく表わしているとすると、Roland の行く手にも Lear と同じような悲しい運命が待ち受けていると解することが可能である。さらに Roland の古謡は、妖精の王がバード・ヘレンを誘拐して、兄ローランドが彼女を救い出すまで暗黒の塔に閉じ込めておくものである。Browning は二重の物語の枠組を用いて、Roland の嫌悪と孤独の旅を中心に描写している。Browning がこの二重の枠組を用いた意図は一体何であろうか。まず第一に、私達はこの詩の源泉に R. Browning と E. B. Browning の苦悩に満ちた情熱恋愛の体験を等閑視することは出来ない。Roland が不安と絶望の極限に於いて、暗黒の塔に向かい全身全霊を込めて吹く角笛は、Browning がロンドンの Wimpole Street の暗い二階の部屋、つまり暗黒の塔に幽閉されていた女流詩人 E. Barrett その人に向けて吹いたと言える。角笛は Roland の暗黒の塔への到達と彼女をそこから救い出す可能性を示す愛の伝達と読むことが出来る。Browning は、音の持つ不思議な力をいろいろな詩の中で用いている。たとえば Pippa の清く澄んだ歌声、Hamelin の笛吹き男の吹く妙音、Saul 王に聞かせる David の歌。Roland の角笛から流れ出る鋭い音は、堅く閉ざされた暗黒の塔を通過し、愛しい女性の魂の核心に鋭く触れたことが感知される。この瞬間に於いて、暗黒の塔は暗闇から光明へとまたたく間に変様して行く。暗黒の塔は、死と生の同時性を有する空間であり、新しい精神の開眼が成就される場でもある。

しかし Browning は自分の体験をさらに深化させ普遍化しようとしている様に思われる。それは Browning の詩精神の底流をなす認識の基本的な形態と深くかかわる問題である。処女作 *Pauline* において懐疑と絶望の深淵から生命に満ち溢れた自己に目覚めて行く。16 世紀にスイス

に実在した医者兼哲学者を描いた *Paracelsus* では、愛を求めることを忘れ完全な科学的知識を追求するパラセルサスが臨終のまぎわに、愛の探求にいそんでいた詩人アプライレの幻を見る。パラセルサスは知識追求の終りに到ってはじめて愛の意味を知ることになる。これらはいずれも主人公たちの自己一心の最も奥深い内的な中核—探求のあくことなき旅である。この認識の形態は、西洋の合理主義の基盤をなす正・反・合つまり愛・嫌悪・高次の愛という弁証法的な思考が顕著に見られるのである。暗黒の塔は、心理的に行き詰まりの状態に陥っている者が、虚無の深淵、カオスに直面し無意識の深海に影としての塔を認め、新たな精神の世界を切り開く空間である。閉ざされた影としての塔の中に、心の中核をなす自己が幽閉されている。隠された自己の解放に関して、Joseph L. Henderson は示唆に豊む考えを述べている。

超越をとおして解放されるというこの種のものの最も一般的な夢の象徴に、孤独な旅、あるいは巡礼の主題がある。それらは、ある意味では精神的巡礼とみられるもので、その旅によって、入門者は死と本質と親しくなるのである。しかしながら、これは最後の審判あるいは力の試練としての死ではなくて、解放への旅であり断念と贖罪であり、ある種の憐れみの精神に統括され、保護されることである。この精神はイニシエーションの「教師」(master)よりも、むしろ「恋人」(mistress)によってしばしば表わされる。それは、中国仏教の観音のような、キリスト教グノーシスの教理のソフィアのような、また、古代ギリシアの知恵の女神パラス・アテナのような最高の女性像(すなわち、アニマ)⁽²²⁾である。

暗黒の塔には、幽閉され姿を見せない高い女性が存在している。この女性(アニマ)は、孤独な巡礼者を絶望と死の深淵から救い出す愛と力を具えている。Rolandの暗黒の塔への旅は、最高の女性の愛を得て真実の自己を発見し解放する精神の巡礼と考えられる。ここに暗黒の塔の象徴性があると言える。

5 おわりに

私達は“Childe Roland to the Dark Tower Came”の作品を過去の批評をふまえ、Rolandの旅を嫌悪の観点から考察し、寓意的解釈から深層心理学的解釈へと変化していることを知ることが出来た。続いて Browning の作品中における建物の二面性について具体的に4篇の詩を取り上げてみた。建物が詩の中で重要な空間を演じ、新しいものを生み出す母体であることを認め、この建物の創造的な面が、“Childe Roland to the Dark Tower Came”に於いて見られることを、暗黒の塔の象徴性として考えてみた。Browningは*King Lear*と古いballad“Child Rowland and Burd Ellen”をこの詩の枠組として用い、その中に彼の恋愛体験を盛り込み、さらに象徴的な意味を示そうとしている。それは暗黒の塔の中に理想の女性(アニマ)が幽閉され、彼女の愛によって本来の自己を見出すことが可能になることである。暗黒の塔の象徴性は、Rolandの死から再生が成就される心の奥底の闇の空間である。それは生命力に満ち、新しいものを生み出す母胎、つまり詩創造の磁場が豊かに内在する原始のカオスの空間であると言える。

【注】

- (1) W. C. DeVane, *A Browning Handbook*, Appleton-Century-Crofts, Inc., 1955, p.228.
- (2) Ibid., p.229.
- (3) Ibid., p.229.
- (4) Ibid., p.229.
- (5) Mrs. Sutherland Orr, *A Handbook to the Works of Robert Browning*, Kraus Reprint Co., 1969, p.274.
- (6) Griffin and Minchin, *The Life of Robert Browning*, Archon Books, 1966, p.198.
- (7) W. L. Phelps, *Robert Browning*, Archon Books. 1968, p.232 並びに p.237.
- (8) Edward Berdoe, *The Browning Cyclopaedia*, London: George Allen & Unwin Ltd., 1924, pp.104-5.
- (9) Ibid., p.105.

R. Browning: "Childe Roland to the Dark Tower Came"

- (10) G. K. Chesterton, *Robert Browning*, St Martin's Press, 1967, p.159.
- (11) Robert Langhaum, *The Poetry of Experience*, The University of Chicago Press, 1985, p.194.
- (12) *Ibid.*, p.194.
- (13) Thomas Blackburn, *Robert Browning*, The Woburn Press, 1967, p.193.
- (14) Clyde de L. Ryals, *The Life of Robert Browning*, Blackwell, p. 128.
- (15) "Childe Roland to the Dark Tower Came" 11. 19-24.
- (16) C. G. ユング, 林道義訳『元型論 無意識の構造』, 紀伊國屋書店, 1990年, 58頁。
- (17) 河合隼雄著『昔話の深層』, 福音館書店, 1981年, 148—9頁。
- (18) "Childe Roland to the Dark Tower Came" 11. 180-6.
- (19) 高橋裕子, 高橋達史共著, 『ヴィクトリア朝万華鏡』, 新潮社, 1993年, 83—102頁。
- (20) "By the Fire-Side", 11. 66-75.
- (21) 飯田正美著, 『闇の国のヒロインたち』山口書店, 四「チャイルド・ローランド」参照。
- (22) C. G. ユング, 河合隼雄監訳, 『人間と象徴 無意識の世界 下』, 河出書房新社, 241頁。

R. Browning:
“Childe Roland to the Dark Tower Came”
— the Symbol of the Dark Tower

Tadao NOGUCHI

We have examined the poem based on past criticism and have tried to read Roland's journey to the dark tower while investigating the point of hatred. We can find the change of criticism from allegorical studies to deep psychological ones. Moreover we consider the two sides of the buildings—the open building and the close one—in the works of Browning in order to know the importance of the buildings as the space or matrix for creating new things.

When we read the poem, it is clear that Browning uses *King Lear* and the ballad of “Child Rowland and Burd Ellen” as the frame of the poem. We suppose that he puts his own love affair between Elizabeth Barrett and himself in it, and shows the symbolical meanings. That is, there is a good lady, anima, shut in the dark tower, and Roland can only reach his real self by the help of her love. We think that the symbol of the dark tower is the dark world in his deep mind where he can gain the rebirth from the state of death. It also can be said that the world is full of energy to creat his life and his poetry.